

勝ち組

愛国詐欺

「ポスト真実」と「南米勝ち組事件」

三山 喬

第10回

罪深い阿部の所業

戦前の南米大陸で、ブラジルに次ぐ日本移民受け入れ国だったペルー。終戦後、祖国敗戦の報を大多数が受け付けず、勝ち組が支配的だったブラジルの邦人社会と比べると、ペルーの勝ち組はごく一部の少数派に留まり、流血の惨事を引き起こすこともなかった。それでも「日本の戦勝」という荒唐無稽なデマを盲信し、現実から目を背けた人々は、この国の邦人社会にも一定数出現したのだった。

その組織「愛国同志会」がリマ市に生まれたのは、終戦から約四か月になるうとする一九四五年十二月のこと。そして翌年の五月末、ブラジルから大陸を陸路横断し、インディオに変装してペルーに密入国してきたのが、阿部謙三と鳥越武であった。

ック・アーサー将軍を捕虜にした。
日本艦隊は現在パナマ運河の近くにいますが、近く在留邦人引揚げの目的でペルーに来る……」
厚顔無恥、内心赤い舌を出しながら尤もらしい顔つきでそんな大ウソを並べ立てた

『歩み』の編者は阿部への嫌悪感をむき出しに、その講演の様子をそう描いている。愛国同志会が企画した阿部の講演は約三十回、常に三十人程度の聴衆を集めていたという。単純計算でほぼ一日おきに講演会が開かれたことになる。

愛国同志会は阿部に《感謝と畏敬の念を込め》金メダルを贈呈、阿部は同志会に婦人部を設置することも画策していたという。『歩み』にはこんな記述もある。

《かれ（阿部）の命を奉じた同志会の一人がワンカヨに赴いて先導するとたちまちここにも報国同志会なる勝組団体が誕生する》

ワンカヨはペルー中部、山岳地帯の地方都市である。愛国同志会の系列団体として報国同志会が結成され、

このふたり、とくに年長者の阿部は「愛国運動」の先進地・ブラジルからやってきた指導者として受け入れられ、これ以降、愛国同志会の活動は一気に活性化した。リマ市を中心に各地で相次いで講演会が開かれ、八月の初旬、この動きを危険視したペルー当局は、阿部と鳥越、そして同志会の面々を一網打尽に検挙した。彼らふたり組がいた二か月余、愛国同志会は具体的にとどのような活動をしていたのか。二十年ほどして編まれた『在ペルー邦人75年の歩み』と事件当時の地元スペイン語紙の報道に断片的ながら情報が残っている。

《日本海軍は東京湾に集結したアメリカ艦隊を、原子爆弾よりも強力な雲霧爆弾をもって一挙に壊滅、マ

その関係者らも治安当局に検挙されたことは、地元紙の続報でも取り上げられている。

もうひとつ、阿部たちの一斉検挙のあと大きな続報記事になったのは、日本の敗戦を説く「負け組」（ブラジルとは異なり、ペルー邦人の主流派は日本の敗戦を抵抗なく認識し、あえて集団をつくる動きはなかったが、ここでは便宜的に「負け組」と呼ぶ）の有力者と見做した人物に、愛国同志会が脅迫状を送り付けていた、という話だ。

折しもブラジルでは数か月前から勝ち組過激派によるテロ殺人が相次ぎ、そのニュースはペルーでも大きく報じられていた。このため脅迫状の続報は、日本人国粋主義結社の危険性を最も端的に示す逸話として注目されたのだ。

《阿部は》負組を網羅したリスト・ネグラ（ブラックリスト）を作成させ、十五人の者に脅迫状を発送させる。国賊であるお前の首を貫いて行くから用意して待っている、という内容で各人に対して一人の暗殺者が決定していたという。本当としたらまさに血迷った恐るべき「血盟団」である》

●みやま・たかし 1961年神奈川県生まれ。著書に『ホームレス歌人のいた冬』（文春文庫）、『国権と島と涙〜沖縄の抗う民意を探る』（朝日新聞出版）、『一寸のペンの虫』（小社刊）など。